



インバウンドで変わる国内宿泊動向

2015年1年間を通じて、ほぼ1.5倍のペースで増え続けたインバウンド旅行者数。今年12月末までには年間の水準で2000万人に近い旅行者数に到達することになりそうです。今月の『深読み』では本稿執筆時点で最新の8月までの宿泊旅行統計をもとに、インバウンドによって地域別の宿泊需要がどのように変わりつつあるか概観します。

2015年1～8月期における国内の延泊者数は前年同期対比で7.3%増加しました。図表1はこの7.3%に対する増加寄与度（実際に増加した延泊数のボリュームに相当する数値）を地域別日本人/外国人別に比較したものです。日本人の寄与度は全地域合計で2.5%、残る4.9%は外国人（メインバウンド）の寄与度です。日本人と外国人の寄与度を比較すると近畿など多くの地域で外国人が日本人を上回っていますが、中部東北、四国の3地域では日本人の寄与度が上回っています。中部は北陸新幹線効果で北陸3県などへの旅行が増えた結果と考えられます。

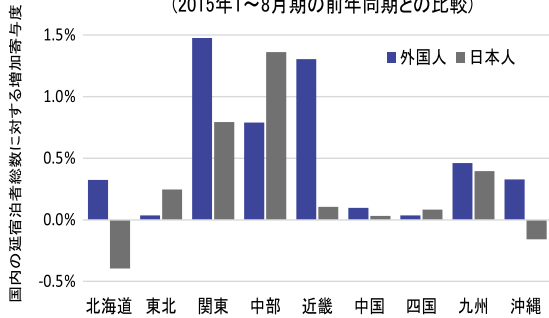
次に同じデータを宿泊施設のタイプ別に分解した図表2をご覧ください。注目したいのは、どの地域でも、シティホテル、ビジネスホテル、リゾートホテルなどホテルの寄与度が大きく、旅館のプラスの寄与度がある程度大きさを持っているのは関東くらいしかないという点です。関東や

近畿のシティホテルは購買力で勝るインバウンドに持つていかれ、ビジネスホテルはどの地域でも奪い合いの状況で室料も上昇しているわけですが、反面で旅館利用の伸びは極めて鈍いというのが現状です。

図表3と4は関東の宿泊需要動向を東京都と、神奈川を除く関東5県とで比較したものです。これを見ると同じ関東でも東京とそれ以外では宿泊需要の動向には大きな違いがあることが分かります。東京ではインバウンド需要の伸びが卓越していますが、関東5県ではシティホテルを除き、日本人の伸びが外国人を上回っているのです。因みに北陸3県も図表4と似た構図で日本人需要増が卓越した形になっています。

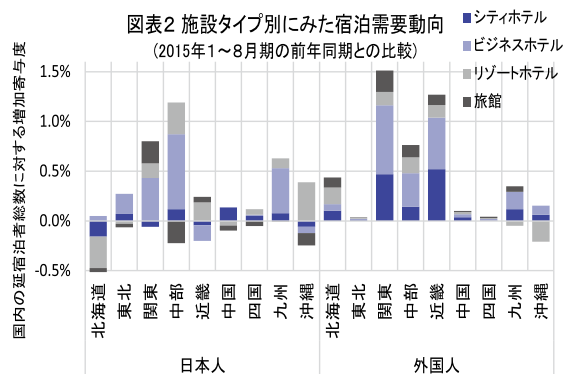
全くの仮説であることをお断りしながら、これらのデータが示唆するところを小職の個人的な見解として述べさせていただきますと、インバウンド需要が集中する地域では宿が高すぎたり取れなかつたりするため、旅行方面や宿泊先の代替需要が顕在化しつつあることが、国内の宿泊動向を変化させ始めている可能性があるのではないかと思います。北陸は代替方面を求めるニーズと新幹線延伸というイベントのタイミングがたまたま合致したことで大きく伸びた可能性があります。今後の国内では上述のような観点で地域の商材を探すが、競争上、重要となっていくのではないかと思います。

図表1 地域別・日本人/外国人別にみた宿泊需要動向 (2015年1～8月期の前年同期との比較)



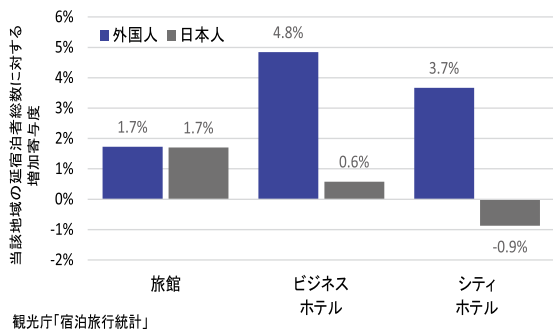
データ:観光庁「宿泊旅行統計」

図表2 施設タイプ別にみた宿泊需要動向 (2015年1～8月期の前年同期との比較)



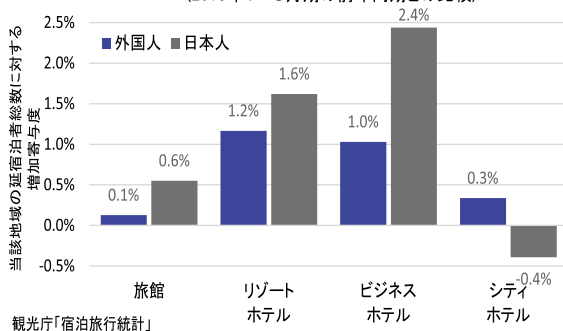
データ:観光庁「宿泊旅行統計」

図表3 東京都の宿泊需要動向 (2015年1～8月期の前年同期との比較)



観光庁「宿泊旅行統計」

図表4 東京、神奈川を除く関東5県の宿泊需要動向 (2015年1～8月期の前年同期との比較)



観光庁「宿泊旅行統計」

黒須宏志
旅行市場動向のリサーチャーとして講演・寄稿などで活躍中。(株)JTB総研 執行役員・主席
研究員。1964年生まれ。